

を打破するという、教団による教義宣布ための教祖像であった。これに対して、当時の青年信奉者層から、教祖が教えを説くに至る信仰形成過程解明への欲求が、教祖伝編纂という形で求められた。

こうして伝記的な人物像への関心から探求が進められるが、当時は直信由来の伝承と、そこから派生した伝承に拠る資料的制約があり、当時の時代思潮との関連もあつてか一種の「神話化」された教祖像も描かれた。この状況が一変するのは、教祖の自伝的資料の存在が教団に明かされてからである。明治四十年に始まる教祖伝編纂過程で、直信が伝える立教年代に疑義が生じたが、銓衡の過程で、教祖筆「金光大神御覚書」の写本が提出されたことで決着した。これにより直信伝承以上の信憑性を持つものとして、この自伝的資料が教祖伝の所依になる。以後「覚書」に基づく教祖探求は、日露戦後の教団の社会活動に対して教祖を範とした信心本位の立場へ回帰すべしとの主張を初め、現実の教団体制への批判を伴いつつ進められた。中でも大正期・昭和期を通じて、「立教神伝」（教祖に対し氏子救済を依頼する神の言葉）に拠り、求信的・内面的な信仰を基調とする教祖像が構築され、教義・教団・教師像の範型を生み出していった。

昭和四十年代になって、教団の社会対応の必要性が論議されるようになり、同じ「覚書」でも明治期の記述に見られる文明批判の視点や社会に積極的に立ち向かう姿勢が注目される。これに歴史学の通俗道徳説など学問動向や教内の教学的志向が相俟って、内心倫理的側面の重視から社会救済への使命感に重心

を移した教祖像が求められていく。折柄、もう一つの自伝的資料（「お知らせ事覚帳」）が教団に提出されるが、対社会的な志向を強める教団動向にあつて、新資料が持つ未解明で多様な可能性の中で、布教を志向する世界的視野の強調へと傾斜していく。これは、教団にとって「未知」で「他」なる教祖と出会う機会であつたが、その後の経過は總体的には、教祖の当事者性（教祖による教祖認識）と教団にとっての指標として求められる教祖像との間に課題を残すこととなった。

今日まで教祖に関する詳細な経歴が蓄積されてきて、改めて「教祖とは誰か」が問題になる。それは伝記の本来的な主題であり、「教祖が何であるか」（構造内の位置、機能・役割的存在意義）とは異なる問題である。またそれは、かつて直信達が眼前にし体感的に捉えた教祖の存在感に通じるものであり、生神性（救いの基、崇拜の対象）と教祖性（教えの基、信仰の手本）の交差するところ、あるいは教祖以後の人間における教祖探求と、教祖自身（自伝的資料）による教祖認識との間の疎隔と架橋の関係を検討する要がある。

パネルの主旨とまとめ

幡 鎌 一 弘

日本の民衆宗教（新宗教）が有するいくつかの特徴の中で、教祖の占める位置の大きさはしばしば指摘される。教祖は、根

パネル

源的生命の湧出する究極的媒体であり、救済者そのものと位置づけられる。この圧倒的な力を持った教祖が没した後、残された信仰者たちは、救済論的切望をいだきつつ、あるいは組織の核とすべく、聖なる人間としての記憶を呼び覚まし、物語をつむぎだそうとする。人間によって構築された一つの救済史的歴史物語が、教祖伝である。従来の民衆宗教研究において、多くの場合、教祖に焦点をあて、教祖によって開示された教義あるいはその活動を読み解きながら、当該教団の宗教性の特質あるいは時代性を明らかにしてきた。この際、教団で作成された教祖伝は、多かれ少なかれ、よるべき一つの史料として利用されてきている。

本パネルでの試みは、新たな教祖論を構築したり概念化したるものではなく、対象をずらし、教祖(像)と信者との間を媒介する教祖伝そのものに注目してみようというものである。教祖伝を叙述する信仰者たる編纂者は、歴史的存在でしかありえない。教祖伝は、教祖没後の教団の置かれた状況、たとえば教祖を失ったことによる教団形成の頓挫ないしは崩壊(分派)といった教団の固有の問題から、国家神道体制や戦後社会など、固有のコンテクストの中で叙述されるものである。さらに、実際に物語を構築するためには、宗教学・歴史学などの学知による分析・概念化を抜きにしては考えられない。教祖伝を分析することは、宗教学や歴史学と教団との関係性も俎上に載せていくことになる。やや欲張っていえば、文・媒体・読者などの文学理論を射程に収める必要もあるだろう。

天理大学おやさと研究所では、教祖伝(聖伝)に注目して研

究を蓄積してきた宮本要太郎氏らと共同して、「教祖論・開祖論の構築・脱構築」という研究会を二〇〇八年度から行っていて、その共同研究に基づきながら、宗教学が教団に及ぼした／ている影響をも視野にとりながら、民衆宗教研究・教祖研究の可能性を探ってみたいと思い、本パネルを企画し、多くの方々の意見を求めようと試みた。

討論の指摘の中で、教祖の性格付け、たとえば、教祖(教義が重視される「教えの親」と生神(救いの業の源泉)との区別や、その源泉が特定の人に独占されているのか信者に分有されているのかなど、類型化が必要だという指摘は、さらなる課題として残された。

今回は、生成した教祖伝のとらえなおしを企図したものが、そもそも教祖伝が教団内部で読まれていることを暗黙の前提としていた。教祖伝の読者の共同体が本当に成立しているかの検証と同時に、教祖伝を語る物語り行為(説教)とそれを聞く聴衆という関係での共同性も模索しておかなければならない。

なお、教団ではなく宗教学者のみを対象とした永岡氏の方法について、教団の事例に即した他の報告との違いが参加者から指摘された。コーディネーターのミスリードも混乱の一端だが、永岡氏の方法は、宗教学者に対象となる教団・信者を記述する特権的な地位を与える既存の構造を脱し、宗教学者・ジャーナリズムも信者(教学者)も等しく教祖を論じ、宗教文化を構築する可能性を論じたものであり、誤解を恐れずにいえば、研究者を検討することが、教祖(伝)を論じることに通じるとい

パネル

うスタンスであり、教団の内と外の区別を脱構築したい本パネルの主旨を突き詰めた形で行われたものと、補足しておきたい。

教祖伝生成の源泉は教祖そのものにあるが、作られた教祖伝を脱構築するのにもまた教祖であるという宮本氏の指摘は、竹部氏や幡鎌の報告に通じていて、民衆宗教の特質に即しても、きわめて印象的であった。

思想としての禪

——近現代における道元の発見——

代表者 何 燕生

コメンテータ・司会 石井修道

諸仏諸祖は道得なり

——和辻哲郎の道元哲学——

ラルフ・ミュラー

和辻哲郎の『沙門道元』における出発点は、いわば道元を解放することにあつたが、それは禅宗一般を批判することによって、道元を禅宗のいわゆる「不立文字」の立場から引き離すことでもあつた。和辻が着目したのは、不立文字の「文字性」ではなく、言語を肯定的に捉えているとする道元思想の原理的な考え方そのものであると言える。そのような観点に立つて、和辻は、『正法眼蔵』には言語にふさわしい概念が存在すると主張する。それはいわゆる「道得」であり、和辻は「道得」をもつて、道元を真理を追究する・知恵を愛する人物と捉える。勿論、悟りと言語とがどのように相互に関係するかは簡単に説明できないが、道元が禅の伝統を批判し、言語を重視したことは明らかである。

和辻は『正法眼蔵』「道得」巻の冒頭の「諸仏諸祖は道得なり」という文章を次のように独自に解釈する。「この場合、彼